

東日本大震災 支援活動報告

● 義援金に関する報告

(1) 法人からの義援金送金状況

義援金送金先	金額
社会福祉法人全国社会福祉協議会 社会福祉施設協議会連絡会	1,000,000円
特定非営利活動法人 災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード	500,000円
日本カトリック児童施設協会	500,000円
第一回義援金計 (H23/4/23送金)	2,000,000円

(2) 募金箱（法人内各施設設置）からの義援金送金状況

義援金送金先	金額
全国乳児福祉協議会（九州乳児福祉協議会経由）	500,000円
第一回義援金計 (H23/5/3送金)	500,000円

● 支援活動に関する報告

- (1) 活動主体 : 社会福祉法人 全国社会福祉経営者協議会
 派遣日程 : 平成23年4月7日（木）～平成23年4月13日（水）〈7日間〉
 派遣先 : 宮城県（社会福祉法人・福祉施設支援本部）
 派遣者 : 聖ヨゼフ園 看護師 木村 徹
 聖ヨゼフ園 副主任生活支援員 小川英則
 富の里 副主任介護士 最所栄策 計3名
- (2) 活動主体 : 特定非営利活動法人 災害福祉広域支援ネットワーク・サンダーバード
 派遣日程 : 平成23年5月15日（日）～平成23年5月19日（木）〈5日間〉
 平成23年6月2日（木）～平成23年6月4日（土）〈3日間〉
 派遣先 : 宮城県仙台市
 派遣者 : 富の里 部長 平田正直
- (3) 活動主体 : 社会福祉法人 全国社会福祉経営者協議会
 派遣日程 : 平成23年8月9日（火）～平成23年8月10日（水）〈2日間〉
 派遣先 : 東京都（東日本大震災復興対策委員会現地調査結果分析作業会へ出席）
 派遣者 : 富の里 部長 平田正直

(1) の支援活動報告

被災地での調査活動

～ 木村 徹、小川英則 の報告 ～

【平成 23 年 4 月 7 日（木） 活動時間：9 時～18 時】

15 時宮城県自治会館ボランティアセンター到着。第 1 班はすでに帰路についており、
全社協職員よりオリエンテーションを受ける。

〔オリエンテーションの内容〕

段階を踏んだニーズの調査を行う。①全ての社会福祉施設②避難所③在宅の順番での調査を計画している。

1. 未だライフラインが復旧しておらず連絡の取れない施設があり、その被害状況を確認すること。現状でのニーズ、中・長期的に渡るニーズの調査。

現状では被災者が被災者を支援していて、2～3 カ月で疲労のピークが来ることを予想している。その前に全社協として人的支援を実施し、働いている被災者へ休養を取っていただくこと、施設が被災し定員超過で受け入れている施設への職員の派遣、被災した職員の補充職員が見つかるまでの間の応急的な職員の派遣を考えている。

2. 宮城県全ての施設リストがあり、震災で被災したと予想される施設をピックアップして第 1 班が訪問できていない施設を訪問する。調査員自ら電話し、訪問の許可を得て調査に行く。

未だ危険な所があり、車で通行できても瓦礫などが散乱しているため、2 名 1 チームで構成し 1 チームは本部で待機して連絡を取り合うこと。

・注意事項

1. 外部の人を受け入れる体制になっていない施設が多いため、無理な訪問調査（強引な調査要求）はしない。
2. 一度調査しても時間の経過や状況によりニーズが変化したり、会話しコミュニケーションを取ることで隠れたニーズを引き出せることがある。
3. 他の支援チーム、ボランティアと重なることがあるが、忘れられた施設の無いように 1 箇所ずつ調査する。
4. 人的支援のニーズ調査のため、物資の搬送はしない。（希望されれば搬送してもよい。）

上記のオリエンテーション終了後、明日以降使用する自分の名札の作成、備品の購入などをして 18 時すぎに解散となる。

〔備考〕

岩手花巻空港から仙台市内の自治会館まで行ったが震災による建物への目立った影響は見られない。タイルが少し落ちていたり、ひびが入っている程度。パチンコ店なども通常に営業している。しかし、コンビニなどの店では食べ物や惣菜が殆ど売っていない。飲食店も限定されたメニューでの営業である。23 時 34 分に震度 6 強の地震あり。3 月 11 日以降最大の余震。全員の安否を確認し、ショートメールで看護部長に報告する。

【平成 23 年 4 月 8 日（金） 活動時間：9 時～18 時】

木村、小川にて現場調査。昨日の余震影響もあり沿岸地域には近付かないように指示あり。

〔調査施設〕

特養	萩の風	宮城県仙台市
保育所	能仁保児園	宮城県仙台市
認知症デイ	こもれびの家	宮城県名取市
養護	松風荘	宮城県名取市
特養	松陽苑	宮城県名取市

〈特養 萩の風〉 …………… 仙台市

震災で職員が 1 名死亡し、5 人の職員のご家族が死亡していた。1 名が津波による家屋流出という現状であったが、津波による被災地に職員の派遣を検討しているとのこと。

〈保育所 能仁保児園〉 …………… 仙台市

仙台市の住宅街にあり震災による甚大な被害はない。職員、家族ともに被害は無いが、ガスが復旧していないため、カセットコンロによる調理をして給食を提供しているなど、献立などに苦労しているとのこと。

〈認知症デイ こもれびの家〉

〈養護 視覚障害老人ホーム松風荘〉

〈特養 特別養護老人ホーム松陽苑〉 …………… 名取市

3 箇所併設施設であった。建物自体はひび割れなどの軽微な損傷であるが、玄関などに地割れが発生している。少数ではあるが定員超過の受け入れもしており、1 個所の施設で人材を派遣していただけるならしてほしいと要望があった。

名取市は津波の被害があったが 3 施設で職員の被災は無かった。しかし家族の被災や自宅の流出があり、職員に空いている部屋などを提供していた。

どの施設からも、3 月 11 日の震災からようやく復興の兆しが見えかかっていたのに、昨日の地震でライフラインが再度途絶えたり、施設が再度損傷したことにより精神的に疲れている等の声があった。

〔備考〕

名取市で訪問した施設の施設長に、「今回の震災は地震による被害も大きい津波にのまれた所は壊滅的だから一度見ておくといい」と言われ仙台空港に向かった。津波は高速道路が防波堤の役割を果たしたようで、高速道路を越えると徐々にではあるが風景が一変した。空港に近付くにつれて建物は原形を留めていなかったり、道路近くに飛行機や車が散乱したりするなど、いたたまれない光景が広がっており、途中で引き返した。

【平成 23 年 4 月 9 日（土） 活動時間：8 時 30 分～18 時】

木村、最所にて現場調査。全社協職員の指示により仙台市若林区、東松島市を調査する。

〔調査施設〕

特養	チアフル遠見塚	宮城県仙台市若林区遠見塚
保育所	南小泉保育所	宮城県仙台市若林区遠見塚

複合 やもと赤井の里 宮城県東松島市赤井

<特養 チアフル遠見塚> 仙台市若林区遠見塚

震災による職員、利用者の被害が無いものの、家屋流出がある。3月11日の震災では目立った建物、設備への被害無かったが、4月7日の余震で暖房機器が損傷。

<保育所 南小泉保育所> 仙台市若林区遠見塚

職員、園児等に被害なし。暖房機器損傷の為、支援物資をお願いしていたが、園児の部屋に置けないような暖房器や電気ストーブが届き、使えなかった。保育園などは仙台市保育課がいち早く対応し、人員などの配備、状況確認などを行っているとのこと。

<複合（特養、ショートステイ、デイサービス） やもと赤井の里>

..... 東松島市赤井

建物自体が新しく地震による被害はないが、津波による床上浸水の被害があり。70名いる職員の約半数の自宅に津波の被害が及んでいる。近隣の住宅が津波により壊滅的で床上浸水の状況にあり、施設再開の問い合わせや受け入れ要請などのニーズが高いが、職員も被災しマンパワー不足の状況である為、支援要請あり。本部にも緊急性が高いと報告する。

〔備考〕

保育園から知りえたことで、復興支援する側の情報の共有ができていない事に気がつく。若林区は沿岸にあり、その他3施設を訪問する予定だったが、立ち入り禁止区域にあった。目視できた施設も1階は壊滅的被害であった。目の前には目を覆いたくなる光景と、異臭が立ち込めて言葉を失った。昨日言われた今回の震災は地震による被害よりも津波による被害が大きいという言葉が頭の中をよぎった。昨日行った空港は復興の拠点となる為、行政の力が入っていたが、若林区は手つかずで、個人の力で浸水した自宅の修繕を行っていた。住宅街は使えなくなった物や津波の残して行った泥であふれ返っていた。震災し1ヶ月経とうとしているのに、私には被災直後に見えた。そんな中、被災した職員が自宅の修繕などをしたいのにもかかわらず働いているのは、地域貢献のためでもあるが、津波で全てを失い住宅ローンや車のローンを2重に組まないといけない厳しい現実があるからだと知らされた。

【平成23年4月10日（日） 活動時間：9時～19時30分】

木村、横尾にて現場調査。全社協職員の指示により、東松島市、石巻市を調査する。

〔調査施設〕

老人デイ	花いちもんめ	宮城県東松島市赤井
老人デイ	はまなすの里	宮城県東松島市小野
特養	ホーム涼風園	宮城県石巻市流留

<老人デイ デイサービスセンター花いちもんめ>東松島市赤井

この地域に津波が来たものの施設に浸水は無かったが、震災時は陸の孤島となったそう。東松島市は津波により、壊滅的なダメージを受けた施設が多く、他施設の利用者を多

く受け入れていた。要介護度などが不明の利用者であっても積極的に受け入れていた。行政の方針が未だ定まらないため、法人内で要介護度の低い利用者であっても、介護保険限度額以上の金額を使用しても、利用者は 1 割負担と決めて運営していた。また、現施設では東松島市の利用者を全て受け入れきれないため、ワンストップケア（ショートステイ）という独自のサービスを 4 月中旬～下旬にかけて開設する予定としており、それについても、介護保険限度額以上の金額を使用しても利用者は 1 割負担でいく予定にしている。建物などのハード面のめどはたっているが、職員の目処は立っておらず、多くの人材を希望されていた。しかし地元産業（農業、工業、漁業）が壊滅状態にある為、いずれは地元住民を雇用したいので、そのつなぎの意味でもボランティア職員の派遣を希望していた。

〈老人デイ サービスはまなすの里〉 …………… 東松島市小野

海辺にあり、より津波の被害の大きい地域にあったが、施設自体は高台にあるため被害を免れた。しかしピーク時で一般住民も含め 137 人の受け入れをしていた。高台の少し下の市役所は避難所となっており、体育館は遺体安置所になっていた。同じ法人の施設が津波で流失し復興が困難の為、その施設の職員を 3 月 31 日付で全て解雇した。その施設の利用者、職員共に行き場がない為、現在でも避難所暮らしをして、無償で働いている。現状資産は無くなり負債だけが残っている。3 月 11 日の被災時、人的被害は無かったが、環境に耐えられずに 10 名ほど離職し、現場責任者は 3 月 11 日以降休まず住み込みで働いている。冷静な口調であったがボランティアへの不満を訴えられる。ボランティアの自己満足で来て 3 日程度で帰る人が多いなどの理由による。被災後 3～4 日なら感謝できるが今は本当に人的支援をしていただけるなら、半年位同じ人、もしくは 1 週間でもいいのでボランティア間での引き継ぎができるような形をとってほしいと要望された。

〈特養 特別養護老人ホーム涼風園〉 …………… 石巻市流留

石巻市は津波による被害が甚大であったが、施設は海の真横に立っているにもかかわらず被害が全くなかった。職員 1 名死亡、1 名行方不明、津波によるケガ 2 名、家族を失った人 5 名、自宅流出 18 名と人的被害が多く、ショートステイを閉鎖し職員に開放している。NPO 法人の支援が早く、被災後 3 日で物資などの援助を行ってもらい、今でも定期的に電話連絡し援助してもらっている。

〔備考〕

今日経験したこと、見たこと、聞いたことは一生忘れられないし、忘れてはいけないと思う。特に、はまなすの里で聞いた事は心に刺さった。実際ボランティアとは善意でもあるが、一部のボランティアにはいい経験を積み来たり、自己満足を得に来たりする人もいて、自分もその中の一人であった。被災者にはそれが見透かされているようで自分自身を恥じた。本当の為になる支援とは何か被災者に教えていただいた。

今まで訪問したほとんど全ての施設に該当することであるが、全社協などの大きい団体では縛りが強く、本当に支援してほしいことはすでに被災者自ら乗り越えている状態であった。一番つらい時期を乗り越えて来たから、これからは大丈夫だという施設が大半を占めた。実質 1 週間周期で来るボランティアは利用者の個別性も掴めないまま終わるような状態だし、利用者から見ても知らない人が次々に来られても不安である。被災直後から

1 週間はそのようなボランティアでも大変ありがたいが、徐々にニーズも高くなり、今回
全社協が目的とする中・長期的人的支援となるとは、はまなすの里の職員が言ったとおり
であると感じた。

また、被災状況や復興の程度にもよるが、行政が動かない中、今回の震災で各法人の理
念、考えが見えたような感じがする。本来同じ社会福祉法人であるため金銭的余力は同じ
ような状況だと考えられるが、デイサービスセンター花いちもんめがやろうとしている事
は大変感心した。

今日、東松島市、石巻市でみた光景は、今まで見た光景よりさらにひどい状況で、昔教
科書で見た原子爆弾を落とされた広島、長崎と同じように見えた。道路は開通していたも
のの未だ手つかずの状態に見え、アンモニア臭が立ち込めていた。

実際に津波にのまれて生還した人の話を聞かせて頂くことができ、震災時の状況を聞いた
が、とても悲惨な状況であり聞くだけでも涙がでてきた。

【平成 23 年 4 月 11 日（月） 活動時間：8 時 30 分～18 時 30 分】

木村、小川にて事務作業。本部にて事務作業を行う。

各調査隊より定時連絡を受け、他の調査隊と重ならないように調整するほか、昨日の訪
問調査のパソコン入力。この日、エクセルの入力シートが完成し、全施設を住所や施設種
別で絞り込めるようになる。

〔備考〕

事務作業はエクセルの関数などを使える人が重宝されたが、他施設の職員にそういう人
がいたため、エクセルのシートが完成し、この日よりパソコンの入力や施設検索が容易と
なる。改めて災害ボランティアセンターに出入りしている団体を数えると、16 団体以上
あった。それぞれ復興支援という目的だが、活動内容が違うためか情報の共有ができてい
ない。

朝 9 時と 18 時に活動報告のミーティングがあるが、積極的に発言している団体は少
数である。そのためか、実際私たちの行っている訪問調査も他の団体が行っていて、名刺
もない私たちが疑われる事もあった。実際私たちが行っている調査は人的支援のニーズ調
査だが、聴取する内容は職員の被災状況やハード面の被災状況の確認であり、他の団体
が行っている調査内容とほとんど同じであった。その辺の情報の共有ができればもっと効率
的になるのではと感じたが、実際調査が重なっても、現場を目で見て、現場の生の声を聞
くことは調査票で見るのとはかなり違うと感じた。

【平成 23 年 4 月 12 日（火） 活動時間：8 時 30 分～19 時 30 分】

木村、最所にて現場調査。全社協指示のもと松島市、東松島市、塩釜市を調査する。

〔調査施設〕

複合	矢本華の園	宮城県東松島市矢本
特養	清楽苑	宮城県塩竈市清水沢
複合	荻の里	宮城県塩竈市

<複合 矢本華の園> 東松島市矢本

施設への津波の被害はなかったが、施設の周りは津波の被害にあい、3名の方が流されてきて救助活動を行った。デイサービスは最近再開できたが、休止中の収入が無いので困っている。震災後、定員超過の受け入れを行っているが、その分の基準のサービスが行えていないので請求はしていない。職員は自宅などの流出で全てを失った人も多く、3月分の給料は震災の被害で出勤できていない職員の給料も含め現金で支給した。行政が動かない中、現状ではこの状態がいつまで続くのか不明のため、現在では要介護度の低い方の利用は断っている。

人材の支援はしてほしいが、短い期間では個別のニーズ応えることも出来ないだろうし、利用者も不安になるので要望はしない。

<特養 清楽苑> 塩竈市清水沢

施設が山斜面に建っていて施設内で地割れが発生し、施設へのダメージが大きかったため、50名の利用者を同じ法人の3施設に避難させており、スタッフも配分している。施設内の地盤沈下も目立ち、復旧の目処はたっていない。施設の修繕にも費用がかかるため、検討中である。

<複合 荻の里> 塩竈市

施設は比較的近年に建設されたこともあり、建物自体に損傷はないが、入浴設備、テラスなどに損傷があるため、被災後2週間は1階に宿泊させていた。震災前より4月からの食事は委託形式に決まっており、現在は食事の提供などに困っていない。4月15日から特養に10名、デイサービスに20~30名、被災した施設より受け入れる予定だが、短期の人材は希望はしない。行政の動きが遅く、その日や対応する職員により言う事が違うので困っている。

〔備考〕

今日訪問した、矢本華の園では長時間調査以外にもいろいろな話を聞かせていただくことができた。その施設長さんより、「震災後、復興に向けてみんなが超過勤務が通常の状態となる中で頑張ってきた。3月までは管理職以外の多くの職員も泊まり込みで働いてくれた。みんなが少しずつ頑張ってきた状況の中で、あなた達が来てくれ、話を聞いてくれた。こぼれそうになっていた心が、話を聞いてくれたことによりまた頑張ろうという気持ちになれたので感謝します。現状では精神科医も逆に話を聞いて欲しいという状況で、この頑張りを伝え親身になって聞いてくれたことで、踏ん張ってきた自分たちに表彰状をもらった気持ちになれた。」と仰っていただき、今回ニーズ調査という間接的な支援の中、微力ではあるが力になれたと感ずることができた。

【おわりに】

今回、言葉にならない経験をして悲しみ、目の前の現実に関力の無さを感じ、現場の指揮の統率の無さに苛立ちを感じたが、これは私だけでなく、何十万もの人たちが他人に理解されない悲しみを感じていると思う。現時点ではその悲しみや苛立ちはその人たちの支えにはならないことを痛感した。物事を冷静に見て現実を事実として記録し、それを皆に伝えるまでが今回の任務だと感ずる。

今後、中・長期的な支援をするなかで、慈愛会として役割を果たせるかは、これから試されると思う。今回の派遣で終わるようなら私達の意味は無くなると感じ、そうならないように願う。同じ日本で起こっている震災なので、いち早く支援の手が行き届き、被災された方が少しでも休まるように願う。

今回派遣させていただき、無事現地での任務を全うできたのも、快く送りだしてくれた家族やヨゼフ園の皆がいたからだと思う。また、現地で心が折れそうになり弱音をはいた時、電話などで支えてくれた上司に感謝します。

被災地での調査活動

～ 最所栄策 の報告 ～

【4月4日（月）】

- ・研修先から帰園後の 17:40 頃、災害派遣の要請が全国社会福祉協議会より 14:00 頃あったと受ける。
- ・施設長および部長等含め、派遣概要を確認。事前準備等の調整を行う。なお、装備品等は法人にて準備することの受け、着替え等の準備を個人で実施することで調整。
→派遣までの期間が実質 2 日間しかなく、必要な装備等の詳細なアナウンスなし。また、第 1 陣からの情報もなく、宿泊先および派遣先の情報もなし。

【4月5、6日（火）】

- ・派遣に備え、勤務および業務調整、派遣期間中の不在による業務処理等を実施。

【4月7日（木）…派遣 1 日目】

- ・九州チーム（慈愛会 3 名、恵徳会 1 名）は福岡空港発、東京羽田空港を經由し、いわて花巻空港着。レンタカー（全社協にてレンタル）を借り受け南下。東北道は、各所道路状況が悪い所あるため速度規制あり。15:00 頃、宮城県庁舎内の宮城県社会福祉協議会に到着。
→移動中に全社協からの法人宛メール着信。主旨としては、第 1 陣の調査状況や計画的調査ができていないこと等の報告、およびこれに対する心構えの依頼。直接的な事前情報として役に立った。
- ・仙台市内は一部道路状況が悪い所がみられるも、これによる渋滞を除いては平穏な状態。ただし、コンビニや外食チェーン等は品薄欠品および限定メニューで営業、もしくは閉店状態。大手スーパー等も閉店。
- ・全社協は宮城県庁 2 階災害ボランティアセンター（以下「災ボラ」）内の共有スペースにて「法人・施設支援対策本部（宮城県）」を設置。県庁舎内は壁等にひび割れ等多数あり、地震による損傷が多くみられる。
→全社協として使用できる PC は 1 台のみ。プリンターも共有のものであり使い勝手が悪く、同じフロアに設置してあるコピー機も間借りしている状態のためか使用で

きない。コピーする際は県庁から数十 m 離れた仙台市ボランティアセンターにてするようにと受ける。かなり融通の利かない状況下で第 1 陣が動いていたことを認識するとともに、災ボラ内の協力体制のなさを痛感。

- ・ 全社協職員より、今回の調査に関する具体的内容や方法、調査体制やその他事務的な説明を受ける。
 - 調査施設リストが作成してあるが、暫定的なものであり沿岸地域に限定されたもの。また、リストがどのような経緯で作成されたものか不明。内容も乏しい。その他の調査先に関する情報は、第 1 陣が残していった手書きの調査票（PC に入力等なし）や地図上に書かれた施設名のみ。これが散在しており、まずはこれを整理すること、および必要な物品の買い出しに向かう。指揮系統が混乱している状態が伺えた。初日の活動はこれで終了。スムーズな調査が実施できるか不安がよぎる。
- ・ 宿泊先ホテルにて。23:32 頃、緊急地震速報鳴動（携帯電話）とともに震度 6 強の地震発生。直後に停電（自家発電に切り替え）。津波警報あり。物は散乱したが、他調査員の怪我等なし。周囲は停電の様子。以後余震が継続するとともに、緊急車両の往来が数回ある。1 時間後津波警報解除。
 - 初日より。改めて被災地に来たということを実感させられる。地震および津波の恐怖、不安、余震によるストレスを実感する。

【4月8日（金）…派遣 2 日目】

- ・ 本格的な調査体制に入る。九州チームは調査隊と事務隊の 2 人 1 組、2 チームに分かれて実働開始。
- ・ 今後全社協としても、避難所等へのニーズ調査も模索していきたいと考えていたが、災ボラ全体ミーティングにて、避難所への安易な立ち入りは自粛するよう依頼あり（避難所のコミュニティ化と生活の場としての認識のため）。
- ・ 調査施設リストが不十分であることを踏まえ、全社協職員と協議し、新たにリスト作成を模索。恵徳会の横尾氏が中心となって作成を進める。PC 環境悪く（ネットが繋がりにくい、情報がない等）作業が進みにくい状態。
- ・ 調査隊については先日の最大余震を踏まえ、道路状況等を鑑み、仙台市近辺の施設へのニーズ調査を数カ所実施。仙台空港近辺の被害状況を確認。
- ・ 自身は事務隊として残り、調査チームの誘導および調査施設リストに必要な情報集約等を実施。
 - 第 1 陣の計画的な調査実施状況がみえない状態。作成された調査票については、誰がどこに調査に入ったのか、ニーズ自体も分かりにくいものばかり。また、調査リスト作成に関しても、なぜ今頃になって作成するのかと疑念が湧き、できることをやろうという思いと葛藤が生じる。さらに「縦割り」による情報共有の少なさに閉口。
- ・ 全社協より、岩手県内の施設被害状況等の調査は、随分と早く進んでいるようだを受け。宮城県がなぜ遅れているのかは不明。
 - 行政や各種協議会が、情報を共有せず、独自に調査をしている現状がある。このため調査が重複することも多数出現している。災害時のみでも、各種団体が協力し合い、調査を実施できる体制づくりや、ガイドラインづくりを行う必要性を感じた。

→調査隊より。ニーズ調査に関して、事前に電話連絡をいれるものの、ほとんどが「飛び入り調査」のため、調査先より疑心的対応を受けることあり（詐欺疑いや調査の遅さを指摘等）。配布する理事長様宛の資料には公印等なく、内容も圧力的な部分も（これに対する指摘もあり）。

- ・津波による直接的な被害を受けていない施設について、ライフラインの確保以外では、施設および設備等の損傷の報告あり。一般住民の受け入れ、要介護者の受け入れをしている施設もあるが、これによる緊急的なニーズは聞かれず。
- ・先日の余震にて、新たな被害や被害拡大の施設多数（7日にガスが復旧するも余震で再停止等）。
- ・宮城県北部でのあらたな拠点づくりの模索（登米市近郊）を開始。先日の余震により道路状況等様子をみながら進めていく。

【4月9日（土）…派遣3日目】

- ・引き続き横尾氏を中心として、調査施設リスト作成を実施。また、合わせて調査隊の日報（PC内）も作成。事務関連では、全社協専用のプリンター、PCを各1台購入。効率も上がり軌道にのった印象へ。
- ・本日より、第2陣調査隊後発組（8日夕方仙台入り）も本格始動へ。
- ・調査方法に関して全社協より提案。法人単位での調査を実施していくことで一致。
- ・自身は慈愛会木村氏とともに仙台市若林区、石巻市周辺の施設の調査に入る。法人単位での調査ということ念頭に、法人内での状況も合わせて伺う。
- ・調査対象施設の中で、沿岸部に近い施設を目指すも暫定リストより壊滅状態と確認。
 - 周辺の状況は報道の比にならないほどの惨状。言葉にならない。奇しくも宮城県を南北に走る三陸道路が、津波の堤防役を果たしている様子がみられた。沿岸から数キロにわたって、津波による何らかの被害を受けている。特に川沿いは津波が遡上している状況もあり、内陸部まで被害が及んでいる。
 - どこの沿岸部に向かうにつれても、まず道路が汚れ始め、周辺は津波が運んできたゴミが散乱している状況へ一変。徐々に路肩に寄せられた泥の塊が高くなり家屋が浸水、損傷、倒壊している、もしくは跡形もなくさらわれているという状況がみられた。身が震えるとともに無力感が全身を包む。通行が危険と思われる道路もみられる。9日は生憎の天気も重なり、路面は泥状化。なんとも言えない臭気が一帯を覆っていた。
- ・調査先の保育園にて。仙台市内の保育所および幼稚園に関しては、すでに市の保育課が入り、子どもの受け入れや職員等の調整を行っている旨の話を受ける。緊急的なニーズは聞かれなかったが、手厚い保育環境の整備や職員の休養という点では、潜在的なニーズがあると思われた。
- ・調査先の特養にて。当施設は川沿いにあり遡上した津波の影響を受け、1階は床上浸水の状態に。職員の被災もあり（1名行方不明等）。当初2階に利用者を移動させ、避難者も受け入れていた。1階部の復旧を急ぎ、ようやく落ち着いた状態。ただ、地域からの高齢者の受け入れ要請が多くある。受け入れをしたいと考えるが、これを進めていくにあたり、職員が対応していけるか不安。しかし、介護職員派遣等があったとしても、受け入れがスムーズにできるかと言えば不安（寝食提供や短期間での利用者との信頼関

係づくり等)との話を受ける。

→保育所の調査に関して。行政との連携が不可欠と感じたが、この点の連携が期待できないことを痛感(情報を出せないと受けた?←詳細不明)。

→地域からの受け入れ要請にあたり、施設の中で葛藤が起こっていることを認識。非常に難しい問題だと痛感。施設側の裁量に任されているのが現状のよう。

- ・18:40頃、比較的強い余震(震源地福島県:震度5)。

【4月10日(日)…派遣4日目】

- ・九州チームは、東松島市と石巻市方面、また北部で比較的 inland の 1 市 2 町(美里町、湧谷町、登米市)方面に分かれて調査に入る。
- ・自身は慈愛会小川氏とともに後者の調査へ。10日は日曜日ということもあり、各法人や施設に連絡を入れるも担当者が不在であったり、電話にでる方がいない等で調査先が絞り込めず。
- ・ inland 部は津波の影響がなく被害も少ないと考えていたが、地震による直接的被害が各所にみられる。7日の余震も多分に影響している様子。道路が陥没、隆起していたり、古い家屋が倒壊していたりという状況がみられた。仙台市の渋滞もひどく、登米市に向かうまでに約1時間半ほどの時間を要した。
- ・結局一法人の調査のみにとどまる。本部より、北部拠点づくりの足がけとして道路事情等を確認することを目的に、女川市方面へ向かうよう依頼あり。
- ・石巻市経由で女川市を目指すも石巻市内の被害が酷く、先日の余震の影響も相まって、女川市までの道路が通行できない状態であったため引き返す。
 - 石巻市内は震災から1ヶ月が経っているにも関わらず、深刻な被害状況のまま。見通せなかったほど家屋が建っていたという地域も津波が押し寄せ、通りから周りを見通せる状態にまでなってしまう。大型の船舶が町の中に転がり、トラックは家屋に突っ込み、車両が通行するのも、危険な箇所が多数存在する。避難所となっている学校の窓から、市内を眺めている方々がいた。その心は如何ばかりかと想うと、言葉もでない。災ボウでの状況からも察するに、やはり宮城県北部は支援のスタートが全体的に遅かった様子が伺える。非常に残念に感じた。

【4月11日(月)…派遣5日目】

- ・九州チームについて、1チームは事務に、もう1チームは、10日に行けなかった北部(1市2町)の施設を中心に調査に入る。また、一部チームは南三陸町にも調査に入る。
- ・自身は恵徳会横尾氏とともに、北部施設の調査に入る。先日の余震の影響で、停電状態となり対応ができないといった施設もあった。
- ・調査に入った施設や法人内にて、緊急性のあるニーズは総じて聞かれず。家屋流出および倒壊、親戚等の死亡や行方不明等、職員自身の被災も多く聞かれる。被災者の受け入れについて、前向きな施設がほとんど。介護職員派遣等の必要性に関しては、あまり感じていないというのが現状。やはり短期間での信頼関係作りや寝食がネックとなる部分が多い。
 - 被災地での悲惨な話を幾つも聞き、涙が出そうになることもあり、無念な想いに包ま

れることもあった。その中でも一生懸命前を向いて、上を向いて、生きていこうとする人たちの話を伺い、こちらも元気づけられることもあった。ある調査先の施設長様が、「(先の)三陸地震の時は色々な人に助けられた。今回は私たちが恩返しをしたいと思っている。」と、力強く話されていたことがとても印象に残った。

- ・ 帰路の東北道にて 17:16 頃、緊急地震速報鳴動（震源地福島県：震度 5）。車のハンドルを取られるほどの揺れを感じる。サービスエリアにて各種情報を確認。また他のチームの状況も確認する。特変なし。以後も有感地震を頻繁に確認。
→自身も被災地に入って感じたことであるが、強い余震は被災地にとって、一步前に進むもうとする気持ちに、多大な精神的ダメージを与えることを強く感じた。とても悔しく感じ、被災地の方の言葉を借りれば、「これ以上、なにを知らしめたいのか？」と、憤りを感じるととともに、どうしようもないという、焦燥感が深まる。（余震のせいで）「3歩進んで2歩下がる。そんな感じだ。」と、話も聞かれていた。

【4月12日（火）…派遣6日目：二ヶ所調査実働最終日】

- ・ 九州チームは、石巻市および女川市方面、東松島市および塩竈市方面に分かれて調査に入る。
- ・ 自身は慈愛会木村氏とともに後者の調査へ。
- ・ 調査先の特養にて。比較的沿岸に近い法人で、職員の被災も多数ある法人（施設長様自身の親戚も亡くされている）だったが、より沿岸に近い老人ホームが津波で壊滅したことを受け、多くの高齢者を受け入れている状態。同じく職員も一緒に受け入れをしている。また当施設の目の前まで津波がきたことで、当初は「打ち上げられた」人たちを、入浴させるなどの支援を必死に行っていたという。いつまでこの状態が続くのか、介護報酬はどうなるのか、多くの不安を話されていたが、外部からの支援（介護職員派遣等）に関しては、「一番大変な時を、乗り越えてきたからね。」と話されるにとどまった。
→自らも被災しながら他者を助け、このような方々の人間としての強さを痛感するとともに、地域の特性なのか、「忍耐強さ」というものを強く感じた。中長期的な視点で、このような法人に対しては、調査を継続していく必要があるのではないかと認識。先が見えないという不安感を解消すべく、国や自治体は超過受け入れ等、特例や介護報酬等の運営上の方針を早期に固め、掲示することが必要だと感じる。
- ・ 調査先の特養にて。塩竈市の高台にある特養で、津波による被害はなかったが、今回自身の調査の中では唯一、地震による直接的被害を受け、閉鎖している施設であった。入所していた利用者は全員、同法人の他施設へ移動。比較的古い施設であり、高台の斜面に建造されていたことで、今回の地震で大きくひずみが生じ、施設自体に運営上危険が生じていると判断しての閉鎖。施設長様より、いつ再開できるのか全くメドが経たない、修繕する方が良いのか、立て直した方が良いのか、調査するだけでも大きな費用が必要等、不安が多くあることを打ち明けられた。当施設で勤務していた職員も同様、同法人内で分散して勤務しているという。
→今回の震災で壊滅した施設を有する法人の中には、運営上先行きがないとのことで、解散を余儀なくされた法人もあったとのこと。また、職を失った職員にとっても、誰を恨むこともできず、本当に無念だったろうと、その心境は計り知れない。一部法人では解散した法人から、雇い入れをする動きもあるとは聞いたが、決して十分ではな

いだろう。震災がどれだけ人々から当たり前の日常を奪っていったのか、ここでも改めて痛感させられた。

- ・調査実働最終日に当たり、レンタカーの引き継ぎや事務作業等の確認を行う。

【4月13日（水）…派遣最終日】

- ・福島空港へ向けて、早朝に仙台市内を高速バスで発つ。
- ・10:08 頃高速バス内で緊急地震速報鳴動。バス内のため強い揺れ等確認せず。特変なし。
- ・福島空港より、大阪伊丹を經由し福岡空港へ。派遣終了。

【最後に】

私たちが携わった調査は、社会福祉施設のニーズ調査といえども、すでに1ヶ月が過ぎたいま、大きな緊急性のあるニーズ等を聞き取れることは、なかなかありませんでした。

ある調査先の施設（ぎりぎり津波による直接的被害を免れたものの、法人内でも被災した職員を多く抱え、また被災者の受け入れを多数している法人）で、施設長様や主任様等を交えて苦労話や不満、これからの不安等を1時間ほどお話したでしょうか。最後に先方様が、こう仰いました。

「あ～、今日は君らが来て、本当に良かった。僕らも今まで一生懸命やってきた。けれどもやっぱりきつい思いもあるし、不安や不満もいっぱいある。今日はそれをあなたたちに、震災後初めて話す（吐露する）ことができた。僕らも話を聞いてほしいんだよね。やっぱり。おかげで少し気が楽になった気がするよ。ありがとう。」

調査する私たちとしても、今回のニーズ調査のスタートは、非常に遅いと感じつつも、施設をまわり、その意義に対して懐疑的な思いがあったことは否めません。

私たちになにができたのか。そう振り返った時、今回頂いたようなお言葉に、救われるような思いがしました。